

関西支部日本労働ペンクラブ 2026 年度春の宿泊交流見学会報告

感動的な体験！諏訪湖のほとり岡谷から 松本、野麦峠へ

関西支部代表 森田定和

(関西支部通信第 48 号＝26 年 6 月号) より転載

日本労働ペンクラブは、今年 1 月 13 日(火)に開催された 2026 年度総会において「あゝ野麦峠、殖産興業を支え近代化の礎となった製糸工女の故郷飛騨への道」、他 1 件計 2 件について労働遺産認定を行った。

認定遺産は、①旧野麦街道（ワサビ沢から頂上に至る 1,300m）と製糸工女の峠越えの苦難を伝える石碑・石像＜乙女地藏尊、「山本茂実を偲んで」碑、句碑＞（長野県松本市）、②製糸工女の峠越えの苦難を伝える石碑・石像＜石碑あゝ野麦峠、政井みね之碑、お助観音、政井兄妹像、地藏堂＞（岐阜県高山市）、③工女宿宝来屋（松本市「歴史の里」内）④野麦峠まつり（松本市／高山市）である。

2026 年度春の宿泊交流見学会は、「野麦峠まつり」に日本労働ペンクラブの会員が参加することにより、その歴史的意義を再確認して参加者がそれぞれ情報発信に努め、「野麦峠」の意義と価値を広く伝えていくことを目的とし、5 月 23 日（土）～24 日（日）に会員 20 名、JAM 書記局 2 名、計 22 名が参加した。

まず 23 日 10 時 30 分～12 時 45 分頃、希望者のみのオプション企画、岡谷蚕糸(さんし)博物館と館内の株式会社宮坂製糸所見学に 10 名が参加した。

1. 岡谷蚕糸博物館・株式会社宮坂製糸所

職員の方の館内説明やホームページを参考に報告する。

明治時代初期、岡谷の人々はイタリアやフランスから導入された洋式製糸機械に創意工夫、改良を加えた諏訪式繰糸機を開発した。その技術は全国に普及し、この地で生産された生糸の多くは輸出され、「シルク岡谷」と世界に轟くなど、一大製糸業地として発展し、わが国の近代化に大きく貢献した。

1964(昭和 39)年 10 月、こうした先人の偉業を後世に伝え、今後の産業発展に役立てるために、諏訪製糸研究会や全国蚕糸業関係者の協力を得て、市立岡谷蚕糸博物館が開館。現在、製糸機械類、文書類、製糸経営史料等約 3 万点を収蔵・展示している。その内の一部の所蔵資料が 2007(平成 19)年に経済産業省より近代化産業遺

産に認定された



(1). シルクとの出会い

①「蚕糸」とは

蚕(カイコガ(蛾)の幼虫)が作る繭からとった糸のことで、主に家蚕(かさん)が作る糸のことを指す。家蚕は、お蚕様とも呼ばれる虫で、これを育てて得られる糸を繭糸(まゆいと)という。動物繊維の繭糸は非常に細く、とても弱いので糸として使うことができず、数本揃えて繰糸の状態に製糸したままの絹糸を生糸(きいと)という。その織物は、生地の違いで平織、羽二重、ちりめん(縮緬)、紬(つむぎ)などと呼ばれ、古来、衣服や布製品に利用されてきた。

②. 蚕の一生

蚕の一生は、卵→幼虫(蚕)→蛹(さなぎ)→成虫(蛾)と完全変態する昆虫だ。約1mmの卵から孵化した蚕の体は、黒色で毛が生え、毛蚕(けご)とも言う。孵化から繭作り開始までは約1か月で、孵化後、幼虫期は殆どの時間を桑の葉を食べて眠(みん)と脱皮を繰り返して1齢～5齢へと成長し、約27日で糸を吐く熟蚕(5齢蚕)となる。熟蚕の体長は約7～8cm、体重は孵化時の1万倍にもなる。約2日間で繭を作り1分間に約20cmもの速さで、最終的に約1,500mもの絹糸を分泌して繭を作る。繭作りが終わるとその中で最後の脱皮を行い蛹に変態し、蚕の種類や環境にもよるが繭の中で約2週間過ごす。繭は、蛹を外敵や厳しい環境から守る非常に大切な役割を担うシェルターだ。その構造が優れた保温性や通気性を持ち、内部の蛹を快適な状態に保つ。この期間を経て蛹は成虫である蚕蛾へと羽化し、繭を破って外に出てくる。成虫はほとんど交尾し、雌蛾は約500個の卵を産む。蛾は何も食べず殆ど移動せずに40数日の短い一生を終える。卵は越冬して翌春に孵化。このサイクルを繰り返す。

このように、蚕の一生は短く、卵から成虫までの各段階が明確に区分されており、繭から糸を取る目的で飼育している養蚕の場合は、絹糸を傷つけないために、蛾が繭を破

る羽化の前に収穫する必要がある。

蚕はカイコガという蛾の一種だが、実はカイコガの野生種はもう存在しない。子どもの頃、滋賀の実家の山林で見かけた自生するヤマ繭とよばれる蛾は、別種の子ママユガ。蛾が自然の昆虫としてエサ探しに必死で飛んでいた時代はあったが、館内で見た成虫の蛾は羽をバタバタさせても飛べなかった。人間にエサを与えられ飛ぶ必要もなくなり、飛ぶ能力が退化するのには悠久の時間が流れていた。

③. 絹文化の起源と伝播

館内の説明によると絹織物は、7000 年前には中国で作られていたという。「中国では養蚕技術の国外への持ち出しは固く禁じられており、特に秦による中国統一(BC221 年)以後は統制が強くなったと考えられている。」(「ウィキペディア」) 家畜として扱わ



れた蚕を数える単位は、「匹」ではなく牛馬同様に「頭」(トウ)だという点に、大変重要視していたことが窺える。

紀元前後の漢代はじめには、現代でも復元が困難な程の高度な技術で高級絹織物が作られていた。中国の絹は世界を魅了し、シルクロードを通して運ばれ、ローマでは金と同じように価値のあるものとして取引された。

(株)宮坂製糸所の中の展示

■弥生時代に中国大陆から九州に伝播【補足】

弥生時代に蚕種が伝わった。『魏志倭人伝』には、243 年に絹織物の倭錦を送ってることから、この時代に錦を製造する技術があったことが窺える。福岡県有田遺跡をはじめ絹の出土しているのは福岡、佐賀、長崎の三県に集中しており、邪馬台国九州説にも影響を与えている。以来、養蚕と絹織物(機織・染色)技術を伝え発展させた渡来の秦氏が開拓した京都嵯峨野・太秦周辺には「蚕の社」といわれる木嶋神社(コノシマジノヂヤ)がある。律令制の 7 世紀からの奈良時代には大和政権の支配領域で養蚕が行われ、租庸調の調として絹が税として納められた(武蔵国など)。780(宝亀 11)年の生産地は 36 国だったが、品質の優れた中国からの輸入は江戸時代に至るまで続いた。

江戸幕府は養蚕を推奨し、諸藩も殖産事業として興隆を促進した。「幕末期には画期的な養蚕技術の開発・発明がなされ、中国からの輸入品に劣らぬ、良質な生糸が生産されるようになった。日本が鎖国から開国に転じたのはこの時期であり、生糸は主要な輸出品となった。」(「同上」)

■上野、武蔵、信濃における養蚕史【補足】

長野県の隣、群馬県の絹織物は実に 1300 年以上の古い歴史を持つ。『続日本紀』には、奈良時代の 714(和銅 7)年に上野(みづの)国(群馬県)の税として絹織物の一種「あしぎぬ(紵)」を朝廷に収めたという記録がある。

他方、埼玉県秩父の絹は江戸だけではなく京阪、地方でも評判となり一大産業となっていた。当時の秩父の中心地だった秩父神社のある大宮郷では絹市が開かれ、この時代の夜祭は「お蚕祭り」とも呼ばれていた。絹織物業の繁栄を背景とした毎年 12 月に行われる絢爛豪華な秩父夜祭。京都の祇園祭、岐阜の高山祭りと並ぶ日本三大曳山まつりの一つ。ユネスコの無形文化遺産にも登録されている。盛大な祭りに発展したのは、養蚕が盛んになった江戸時代中期以降の絹織物業が繁栄を極めてからとされる。農民が養蚕業を営み、職場の自宅で糸を紡いでいた家内制手工業、問屋が農民に機械を貸しお金を前貸しして、できあがった製品を問屋が安く買い取る問屋制家内工業の段階であった。

明治時代、富国強兵・殖産興業政策を進める政府は、外貨獲得のために生糸生産を奨励した。海外の最新技術を導入して大量生産するため 1872(明治 5)年に群馬県に富岡製糸場が誕生した後、工場制機械工業へ移っていく。桐生でも最新技術を取り入れた機械化で近代化に成功。海外での需要に応じて高級絹織物、羽二重を作り出した。次に述べる岡谷とは対照的に今も繊維の複合集積産地として独自の発展を遂げ続けている。

(2). 機械でたどる糸都岡谷ものがたり

館内には、1872 年創業当時の官営富岡製糸場で使われ唯一現存しているフランス式繰糸機や、岡谷で開発された日本を世界の生糸生産国にした諏訪式繰糸機など、当館だけにしか見られない貴重なものが多くある。かつて日本で蚕種製造・養蚕・製糸に使用された多くの道具類が所蔵されている。明治～昭和初期にかけての製糸経営資料、岡谷市の歴史関係の文書類を収録している。「福利厚生・教育環境の整備に関する説明では、1916

(大正 5)年に「工場法」が施行されると、月 2 回定休、就業時間の短縮、余暇の利用、福利厚生施設の拡充などが進みます。工女さんたちは余暇を使って裁縫・家事・修身・国語などを学ぶことができました。」とある。一大製糸業地「シルク岡谷」での労働条件は、時代や企業により様々であったと考えるが、山本茂実著『あゝ野麦峠』に記された厳しい歴史的事実に眼をそむけてはならないのではと思った。

2.宝来屋を訪ね、感動的な野麦峠まつりに参加

5月23日(土)15時、宿舎「仙洛」送迎バスで松本市立博物館分館「松本市歴史の里」に到着。工女宿「宝来屋」、山本茂実コーナーをボランティアガイドの説明を受けながら1時間半見学した。

翌24日(日)10時から一行22名はワサビ沢での第44回野麦峠まつり(松本市奈川と飛騨高根の野麦峠まつ実行委員会共催)の出発式に参加した後、野麦峠を目指し歩いて登る山行班11名、野麦峠まつり会場(お助け小屋前広場)へバスで直行する班11名に分かれて行動。



北陸と関東を結ぶ要路として鎌倉時代より開けた野麦峠は、飛騨国境の難所であり、明治より大正初期には数多くの若い娘達が製糸工女となり信州諏訪地方へこの峠を越えて行った。

工女達が通った旧野麦街道のワサビ沢から頂上に至る1,300mを小中学生が扮する工女の列の後に続く一般参加者の列に加わった。標高差250m前後、平均勾配おおむね20%弱の山道、足元は石のぐらつきで滑りやすく高齢の私にはきつい。吹雪の中の峠道を滑落死したり、病でこと切れた工女を偲びながら何度も顔を拭った。

1時間程かけて11時頃、お助け小屋前広場に到着。周辺の石碑・石像を見学し、野麦峠まつりのイベントに参加した。標高1,600mの高所で水道水は大変冷たく手が痛くなった。イベント会場では植木隆司ペン代表が松本市、高山市、飛騨市の関係者と共に



本部席に着席、参加者を前に挨拶されたことは、野麦峠まつりを労働遺産に認定した労ペンへの感謝の現われと思う。地域発展に貢献された先人への思いを子らに伝え将来に繋げようとする住民や自治体の活動にとっても感動した。